

## 弔 詞

古畑正秋先生には、御退官後、静岡県御殿場市にお住まいでしたが、2年程前から病を得て、お近くの富士岡記念病院および国立東京第二病院に入退院を繰り返しておられ、昭和63年11月23日午前6時52分、富士岡記念病院で永眠されました。享年76歳でした。

先生は、早くから日本における天文光電観測の推進者として自らも変光星の観測をされると同時に、大気光・黄道光研究の先学の士としてご活躍になり、国内及び太平洋・アジア地域の多くの後進をお育てになりました。

戦後、天文学が世間から注目されたのは1957年から始まったIGY(国際地球観測年)の頃からであったと思いますが、その時先生は大気光観測のアジア地域の責任者として観測法を確立され、指導に当られるとともに、これらの地域の観測所から集まる結果をまとめられました。後にIAU(国際天文連合)の大気光分科会の委員長に推されたのは、その御成果が評価されたのであるとうかがっております。また、IGY期間の重要な項目に挙げられていました南極観測にも特別委員会のメンバーとしてご活躍になりました。

その後、宇宙に目を向けたロケット観測が始まるや、大気光、黄道光等の観測機器を搭載し、独特なアイデアで幾多の成果を上げておられます。また、岡山天体物理観測所の観測地決定に際しては、独自に作られたシンチレーション測定機による観測態勢を組織されたり、日食観測では自らもセイロンに出張されたりで、先生には東奔西走の時期も長期間に亘っておられました。私もセイロン日食に連れて行っていただいた一人です。

昭和43年に東京天文台長に任ぜられてからは木曾観測所の建設に意欲を燃やされましたが、これは先生の天文観測者としての情熱がそのまま形になって表われたのではないかと思っております。木曾福島町等の近傍の灯火増加率の少ないこの地方を選ばれましたが、10数年を経た現在でも観測所開所当初の清澄な夜空を失っていないそうです。

昭和44年には日本学術会議会員に推され、天文学の振興にご尽力いただきましたが、さらに測地学審議会を始め関連委員会の委員としても労をいとわずお努めになりました。

御退官後は富士の裾野の大自然に包まれながら、お好きな天文観測をされ、「天文台にいるときより忙しいよ」と笑っておられたそうですが、正に晴耕雨読の晩年を送っておられました。そしてその間にも天文観測者としてのお立場から「自然環境の保護」に助言をされておいでだったようで、頑固なまでに自然人として生き続けられ



た先生的一端を見せられた思いがいたします。

最後になりましたが、日本天文学会としてお礼を申し述べさせていただきます。先生には学会の副理事長、評議員をつとめていただいたほか、数々の御助言をいただきましたが、特に先生のアイデアで改訂された星座早見盤の印税は、長い間天文学会の経営を支えた大切な収入源となっておりました。30年を経た昨年になって、版は新しくなりましたが、この早見盤はこれからも日本天文学会の潤滑剤として生き続けることと思います。

先生の多岐に亘るご活躍を偲びながら、ご冥福を深くお祈りする次第です。

昭和63年12月4日

社団法人 日本天文学会

理事長 高 窪 啓 弥



〔故 古畑正秋先生 略歴〕

- 大正元年9月18日 長野県諏訪郡落合村に生まれる
- 旧制諏訪中学校、松本高校を経て東京帝国大学理学部に進む
- 昭和13年 東京帝国大学理学部天文学科卒業
- " 13~16年 ハーバード大学天文台研究助手
- " 17年 東京帝国大学東京天文台助手
- " 28年 東京大学東京天文台助教授
- " 30年 理学博士(東京大学)
- " 32年 東京大学東京天文台教授
- " 38~39年 ハワイ大学客員教授
- " 42年 国際天文学連合夜天光委員長
- " 43年 東京天文台長
- " 44年 日本学術会議会員
- " 48年 東京大学定年退官 同大学名誉教授
- " 59年 勲三等旭日中綬章叙勲
- " 63年11月23日 静岡県御殿場市富士岡記念病院にて逝去  
正四位に叙せられる